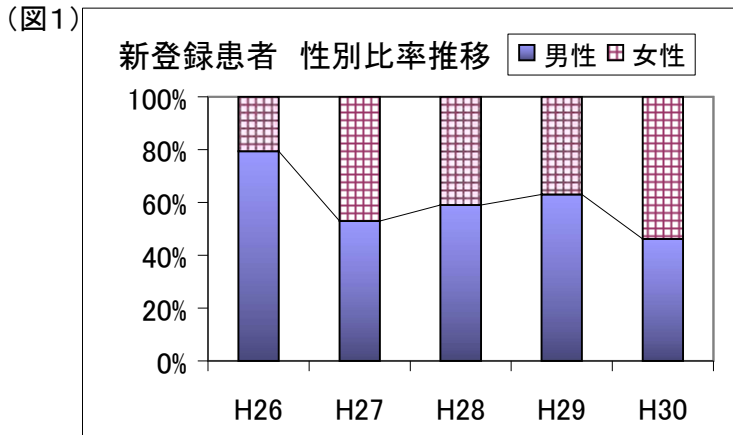


平成30年 結核登録者の状況

1 新登録患者数, 罹患率(表1)

区分	H26	H27	H28	H29	H30
新登録結核患者数	29	34	39	27	26
罹患率(人口10万対)	8.3	9.8	11.4	7.9	7.7
菌喀痰塗沫陽性肺結核患者数	10	15	10	13	11
喀痰塗沫陽性肺結核罹患率(人口10万対)	2.9	4.3	2.9	3.8	3.3
潜在性結核感染症患者数(初感染結核)	14	13	14	13	8



(表1より)

平成30年新登録患者数は26人, 潜在性結核感染症患者数は8人であった。

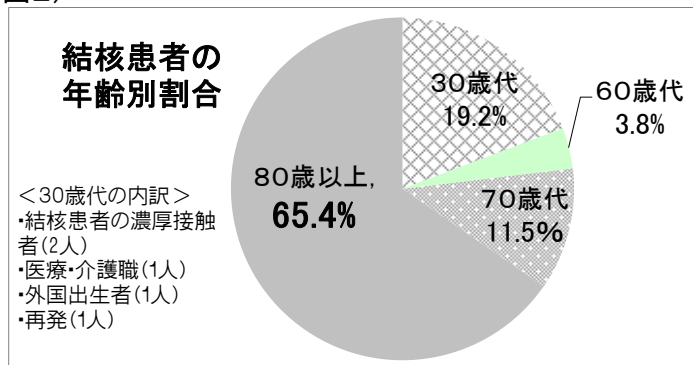
(図1より)

平成30年新登録患者性別比率は男性12人(46.2%), 女性14人(53.8%)とやや女性が多くなっている。

(表2) 年齢別 結核罹患率

年齢区分	患者数	罹患率
9歳以下	0	-
10歳代	0	-
20歳代	0	-
30歳代	5	14.1
40歳代	0	-
50歳代	0	-
60歳代	1	1.9
70歳代	3	6.5
80歳以上	17	48.9
計	26	7.7

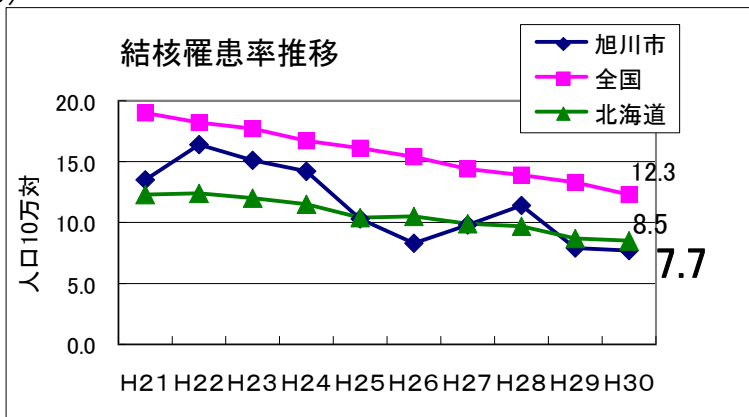
(図2)



(表2)(図2)より

年齢別罹患率は80歳以上が最も高く, 次いで30歳代が高い。30歳代については, 図2の30歳代の内訳のとおり, 濃厚接触者や医療従事者, 外国出生者等の発病リスクの高い者によるものである。年齢別割合では, 70歳代以上が76.9%と全体の4分の3以上を占めている。

(図3)



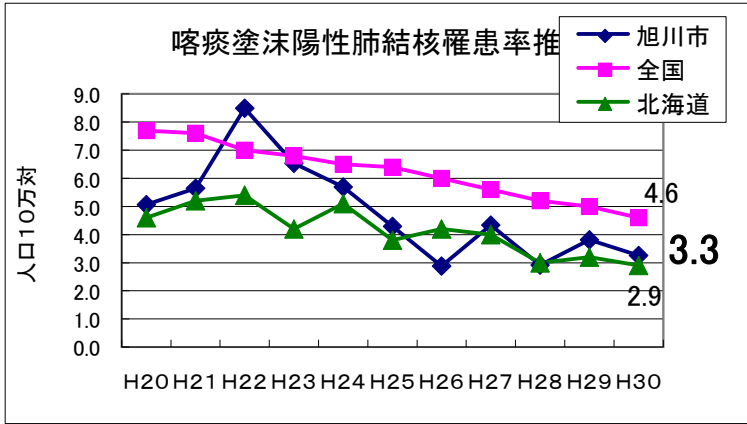
(図3より)

結核罹患率は平成22年以降年々減少し, 平成30年は7.7と過去最低となった。低まん延とされる結核罹患率10未満を平成26年に達成し, H29に引き続きH30年度も低まん延状態であった。

罹患率は全国, 北海道ともに年々減少しているが, 旭川市は全国, 北海道よりも低い罹患率となっている。

※参考: 札幌市 7.9

(図4)



(図4より)

平成30年喀痰塗沫陽性肺結核罹患率は3.3(人口10万対)で、経年的に見ると減少傾向である。

全国より下回っているが、北海道より上回っている状態が続いている。

※喀痰塗沫陽性肺結核: 患者の痰から多量の結核菌が排出されている結核のことであり、周囲の人達への感染源となりやすい

※参考: 札幌市 2.2

2 結核登録者数, 有病率

(表3)

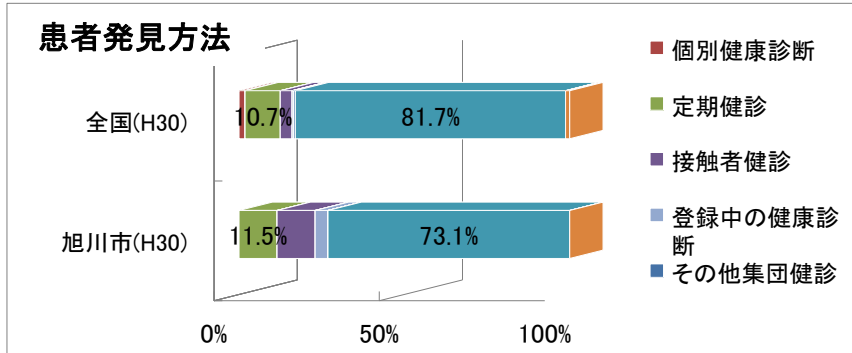
区分	H26	H27	H28	H29	H30
結核登録者数	85	78	75	78	70
活動性全結核患者数	17	30	24	20	21
有病率(人口10万対)	4.9	8.7	7.0	5.9	6.2
全国有病率(人口10万対)	10.6	9.9	9.2	8.8	8.3

(表3より)

平成30年末現在の結核登録数は70人であり、前年より8人減少した。うち、活動性全結核の患者数は21人であり、前年より1人増加している。結核有病率は、前年の5.9から0.3増加し、6.2となっている。

3 新登録患者結核病類

(図5)



(図5より)

新登録患者26人の発見方法は全国と同様に、医療機関受診が19人(73.1%)と最も多く、次いで定期健診が3人(11.5%)となっている。

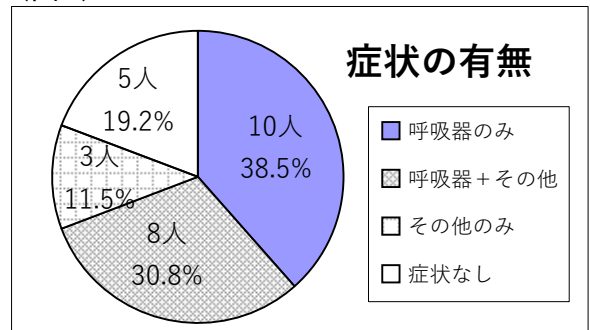
表4 結核患者分類 ※新登録患者26人。複数診断あり

病名	人数	割合
肺結核	26	100.0%
気管支結核	1	3.8%
結核性胸膜炎	3	11.5%
粟粒結核	1	3.8%
腎・尿路結核	0	0.0%
皮膚結核	0	0.0%
結核性心膜炎	1	3.8%
その他の臓器結核	0	0.0%
合計(延)	30	

(表4より)

新登録患者26人の内訳は、肺結核26人(100%)と全員が肺結核であり、うち1人が気管支結核(3.8%)、5人が肺外結核(結核性胸膜炎3人11.5%、粟粒結核1人3.8%、結核性心膜炎1人3.8%)を合併している。

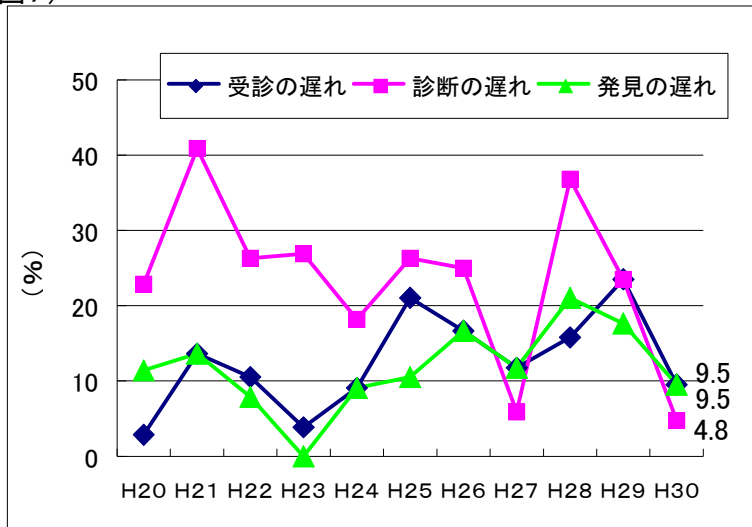
(図6)



(図6より)

肺結核患者26人うち21人が有症状であり、呼吸器症状があったのは18人(69.3%)となっている。

4 新登録有症状肺結核患者の受診・診断・発見の遅れ (図7)



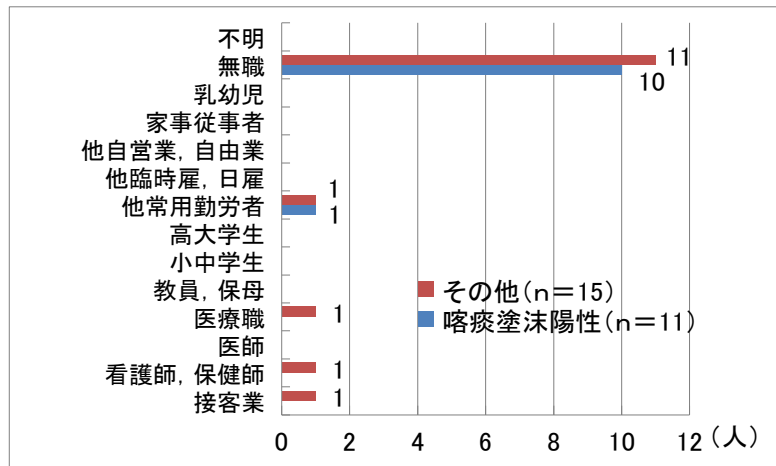
(図7より)

平成30年新登録有症状肺結核患者21人のうち、発病から初診までの期間が2か月以上(受診の遅れ)の者は2人(9.5%), 初診から診断までの期間が1か月以上(診断の遅れ)の者は1人(4.8%), 発病から診断までの期間が3か月以上(発見の遅れ)の者は2人(9.5%)となっている。

全国との比較では、いずれも全国より低い割合となっているが、これは発病時期が「不明」の者が21人中12人いたことが影響していると思われる。

※参考: H30 全国 受診の遅れ 20.6%
診断の遅れ 22.0%
発見の遅れ 20.7%

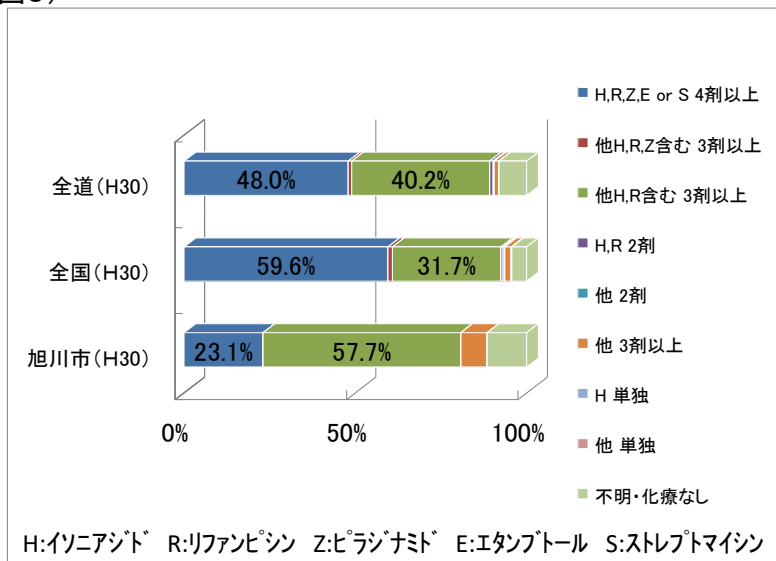
5 新登録肺結核患者 登録時職業 (図8)



(図8より)

新登録肺結核患者26人の登録時職業は無職が21人(80.7%)と最も多く、21人のうち20人が高齢者であった

6 新登録患者化療内容 (図9)



(図9より)

新登録患者26人の化療内容はH,R,Z,E or S4剤以上使用していた者が6人(23.1%)と昨年33.3%から減少。他H,R含む3剤以上使用していた者が15人(57.7%)と最も多い。これは患者が80才以上の割合が高く、ピラジナミドを使用できなかったことによると考えられる。

またH30は、全国・全道と比較して標準治療を行えた者の割合が低くなったが、不明・化療なしが3人(11.5%)いたためである。3人については、登録前に死亡した者2人、登録直後に死亡した者1人のため化療がなかったものである。

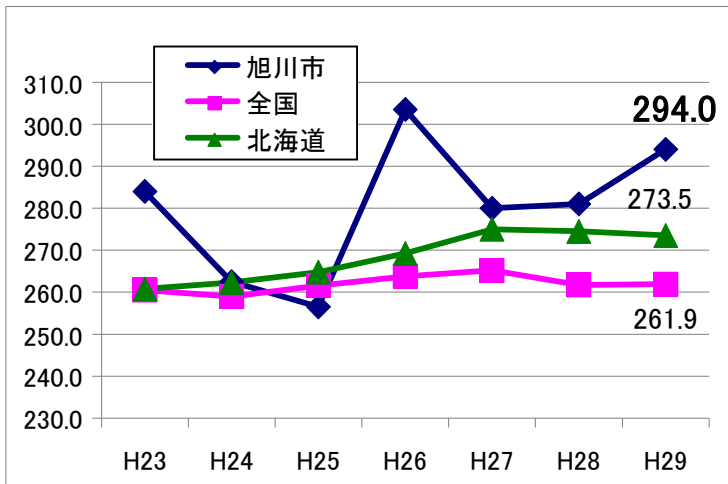
7 薬剤感受性試験結果
(表5)

	人数	割合
結核菌培養陽性患者	17	
薬剤感受性試験実施者	15	88.2%
H耐性/R感受性	1	6.7%
SM耐性	1	6.7%
HRSE全てに感受性	13	86.7%
薬剤感受性試験未実施者	2	11.8%

(表5より)

新登録肺結核菌培養陽性患者17人のうち15人(88.2%)が薬剤感受性試験を実施し、イソニアジド耐性が1人、ストレプトマイシン耐性が1人判明している。主要4剤(HRSE)全ての薬剤に対し感受性のある人は13人(86.7%)となっている。未実施者2人は登録前又は直後に死亡し治療がなかったため実施しなかったものである。

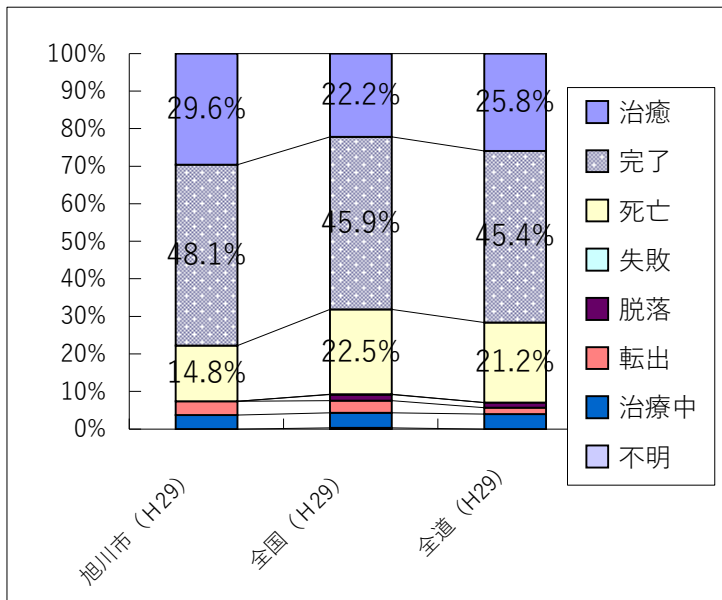
8 平成29年全結核治療完遂継続者治療期間中央値
(図10)



(図10より)

平成29年新登録患者の全結核治療完遂継続者治療期間中央値は294日と、前年より増加した。全国・全道と比較すると長い傾向があるが、要因として、高齢者の患者が多く、副作用等により減感作療法を実施した結果、治療期間が長引く結果となったことが考えられる。

9 平成29年新登録活動性結核患者 治療成績
(図11)



(図11より)

平成29年新登録活動性結核患者27人の治療成績において、治癒は8人(29.6%)、完了は13人(48.1%)で、治療成功率は77.7%であった。

また、死亡が4人(14.8%)のほか、転出が1人、治療中が1人だった。

失敗は0人で、特定感染症予防指針の目標値である5%以下を満たしていた。